

## 産地の研究室から/地域ブランドを育てる(8)

## リレー随筆

## さんしょう

(和歌山県農林水産部みかん園芸課肥料防疫班

さかもとよりのび  
坂本頼宣)

## はじめに

さんしょうは、「小粒でピリリと辛い」といわれるように、その用途は香辛料または薬用として古くから利用されている。さんしょうは全国各地の山地に自生しており、みかん科に属し雌雄異株の落葉性低木樹であるが、樹高は大きいもので3m程度のものもみられる。

ここでは日本一の産地である、和歌山県有田郡清水町のさんしょう栽培並びに今日までの取り組みについて、その概要を紹介する。

清水町は和歌山県の中央部を流れる有田川の上流にあり、年平均気温が14℃で降雨量が2,000～2,300ミリと多く、林野率90%の山村である。当地方は、特産の「ぶどうさんしょう」栽培とともに、夏季の涼やかな気候を利用してシシトウガラシ、トマトの抑制栽培が定着し、これらが基幹品目となっている。

## ぶどうさんしょうの特性

清水町のさんしょうの歴史は古く、古文書によると、700年前に綿、くず、茶、はぜ等とともに地域の特産物としての記録が残されている。

ぶどうさんしょうは、当町の野生種から派生したと言われており、他産地で栽培されている「あさくらさんしょう」に比べ、果実は豊産性で果粒は大型である。乾山椒として品質が特に優れ、香辛料、生薬の原料としては世界一の品種と高く評価されている。



ぶどうさんしょう

## 産地形成の経緯

今から150年前に長峰山脈に自生していたさんしょうを植えたのが始まりと推定されており、昭和43年にさんしょう生産組合を設立し産地化に取り組み、さらに生産拡大を図ろうと、昭和53年からさんしょう増産5か年計画により苗木の補助、並びに事業導入による団地造成等に取り組み、現在では乾果生産を中心とした日本一の産地となっている。

## 販路の開拓

生産物の販売は当初、仲買商人への個人販売のみであり、このため、安値で取り引きされ、収入が安定しなかった。そこで農協と生産組合が一体となり、集荷販売に取り組んだところ、今度は問屋が非協力的となり、新たな販売ルートの開拓が困難なことから、品質が良いにもかかわらず安売りせざるを得なかった経緯もある。

しかし、しだいにぶどうさんしょうの品質評価が高まり、今では「清水町のぶどうさんしょう」という地域ブランドが確立され、産地問屋や香辛料メーカーが、農協や生産組合と直接取引で価格を決定する方式が確立されている。

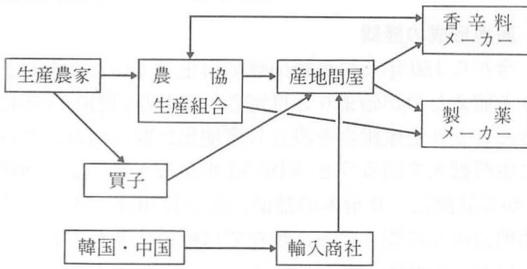
## 試験研究の取り組み

地域特産物であることから、栽培に関する資料が少なく、農業改良普及センター、農協、篤農家の経験等を聞きながら、農業試験場の支援のもと、昭和45年頃に施肥設計の現地試験に取り組んだのが試験研究の始まりである。

その後、生産安定のためには病虫害防除が問題となった。中でも植栽3日目以降の結実を始める頃から株際が腐り、立枯れ症状を呈する木が散見されるようになり、その原因究明と対策が急がれた。昭和48年、果樹園芸試験場支援のもとに立枯性障害対策試験圃を設置して検討された。その結果、疫病菌によるものと判



果樹園芸試験場本場



すず斑症現地防除試験

明し、防除対策が講じられた。

また、昭和54年頃から収穫期に近付くと果実や葉が茶色になる原因不明の症状の発生があり、品質が著しく低下し、関係者で発生原因について検討したが、病害であるか、虫害によるものかさえわからず、最終的に農薬の効果から原因を解明しようと、57年から「すず斑症現地防除試験」が実施された。3年目にある農薬を散布した区で、果実や葉が青々として被害が出なかった。このことからその原因について検討した結果、チャノキロアザミウマの被害であることが判明した。当時、果樹園芸試験場に2本のさんしょうがあり、

サンゴジュ、イヌマキでチャノキロアザミウマの発生消長を調査した結果、さんしょうへの飛来が多いことが判明した。

主な病害虫は立枯病、さび病、ハダニ類、チャノキロアザミウマ、カイガラムシ等であり、昭和60年に県果樹園芸試験場の、当時の病虫部長山本省三氏から防除法についての指導を受けた。

このように、試験研究機関の協力を得ながら栽培指針が作成され、生産安定が図られ産地の強化が進み、今では県内を初め県外の関係者の間で、さんしょうと言え清水町、と言うように名前が知られている。

後藤誠太郎氏（沖縄総合事務局農林水産部農産園芸課植物防疫係長）は神戸植防業務部国際第三課防疫管理官に

農薬検査所（4月1日付）

渡辺 信氏（調整指導官）は退職（3月31日付）

田盛直一氏（検査第二部有用生物安全検査課長）は検査第二部化学課長に

西内康浩氏（総理府公害等調整委員会事務局審査官補佐）は検査第二部有用生物安全検査課長に

阪本 剛氏（農産園芸局植物防疫課課長補佐（農薬第二担当））は調整指導官に

百 弘氏（検査第二部化学課長）は農林水産研修所教授指導官に

## 新刊紹介

### 「植物ダニ学」

江原昭三・真梶徳純 編

A5判、419頁 定価6,500円

全国農村教育協会

ダニ学におけるバイブル的存在であった「農業ダニ学」（江原・真梶著）が出版されて20年が経過した。この間のダニ学の進歩は著しいものがあり、前書を引き継ぐ形の成書の出版が待たれていた。本書はこれに相当し、植物に見られるダニ類とこれらを捕食するダニ類の最新の知見が盛られている。第1章の総論に続く各章では、ハダニ類、フシダニ類、カブリダニおよびナガフシダニ類、その他の植物ダニ類が、また最終の第6章では採集、飼育、防除薬剤などの実験法が詳しく論じられている。

執筆は各分野の最前線の研究者14名（編者を含む）が分担しているが、各種ダニ類の分類上の記述や、図表、

引用文献などは章、節をこえてよく整理、統一されて読みやすく、編者、執筆者の苦勞がうかがわれる。

各章はおおむね形態と分類、生態、防除法（捕食性ダニ類では利用法）といった節で構成されるが、第2章のハダニではこれらに加えて行動、個体群動態、生理生化学、天敵、被害と発生予察などの節が設けられるなど、最近の日本のダニ学に関わる研究者層の充実ぶりが随所にうかがわれる。執筆者には国・地方研究機関の研究者も7名含まれ、基礎、応用両分野が過不足なく取り上げられており、第5章では、最近農業上問題となることの多いホコリダニ、ムキダニ、コナダニのほか、生態系活用型農薬を展開する上で無視できないササラダニが取り上げられている。

こうした内容からみて本書は、ダニ学を学ぼうとする者のほか、府県の研究機関、農業改良普及センター、農協の営農指導部門、防除業などで、時にダニ類を扱わざるをえない立場にある者にとっても必携の書と言える。（井上雅央・奈良県果樹振興センター）